

展望

助詞からのアプローチ

金子智佐代

いづこにも貧しき路がよこたはり神の遊
びのごとく白梅 『馬の首』

積みである貨物の中より馬の首しづかに
垂れぬ夕べの道は

小犬つれしやさしき少女の顔をして夕べ
の雲はくづれつつゆく

『玉城徹全歌集』（二〇一七年）所収の第
一歌集『馬の首』（一九六二年）を読んだ。

一首目はその巻頭歌。戦後の慎ましい日本、
そんな時代の空気感がある。貧しい風景の中
に咲く白梅。そのひそやかな美しさ、明るさ
に救われる。俯瞰の視線からの滑らかな
「神」への展開、「ご」とく」と言いさしたま
まの体言止めなど、繊細で大胆だ。二首目は
タイトルルの歌。夕暮れの駅、存在感たっぷり
の馬、その「馬の首」にびたりピントが合っ
ている。三首目の眼目は長くユニークな比喩。
この修辞によって、たとえ雲が崩れても、読
者にはすでに「少女の顔」が刻印されている。
掲出歌は視覚的絵画的でありつつそれぞれ
がしーんとした奥行きをもつ。この静寂が読
者の心を遊ばせる。

わたしの作品は、体験した現実の模写で
もないし、わたしの生活の再刻でもない。

（中略）これらの作品に、わたしは、自己
の刻印を示そうとしたのではなかった。抽
象的思考——言葉をかえていえば、一の

「美」への祈願——は、つねに、自己の抹
消の企図をふくむのである。

（『馬の首』「後記」）

「後記」からの抄出である。ここで玉城は
自らの作品について語っているのだが、作品
とは何かという読者への問い掛けを含んだ文
章でもあって、考えさせられる。玉城にとつ
て、歌は美を追求するもの、個を超越する普
遍的なものと言えようか。

この「後記」の文章に鋭く反応しつつ、助
詞からのアプローチを試みたのが楠誓英であ
る。楠は〈穴埋めクイズ 玉城徹における
「は」〉『馬の首』を中心に（「短歌」二
〇一九年七月号）において、クイズ（は・
の・が）のいずれの助詞が相応しいか）を取
り入れつつ、玉城の「美」への祈願・「自
己の抹消」に迫ってゆく。一部、引用する。

馬方をはなれてひとり山みちを馬はくだ
り来その山のみち

玉城は、「は」を選択した。上の句では、
主体が明らかにされず、「馬方」の存在が
目に付く。ところが、下の句において「馬

は」とすることで、一頭の「馬」にのみス
ポットライトが当たる。

例歌に即しつつ楠は、下の句の「は」によつ
て主体が生き生きする、すなわち作者が消え
るという手法を解説する。そして、言う。

玉城は「は」を用いることで、ものを見
る「われの視点」を徹底的に削ぎ、ものそ
のものの美を立ち上がらせようとしたので
はないであろうか。

興味深い論だ。「は」という小さな覗き穴
から大きく華やかな世界を見るようなくわ
く感がある。内外の文学や美学、哲学に広く
通じた玉城ゆえに、その歌の奥深さは、思想
から語られることが多いのではなからうか。

助詞からのアプローチは新鮮だ。

異議があるとすれば、次の歌。

死者のひげのびゆくといふことよりもし
づげし湖の岸は芽ぶける

楠は「は」によつて「湖の岸」が「特別な存
在として立ち上がっている」と言う。しかし
私には何度読んでも上の句が沁む。